

たたえよう、しかろう

暖かく

他の過ちを見るなかれ

他の作さざるを責むるなかれ

おのが、何を

いかに作せしかを

自らに問うべし

—法句經—

「たたえよう、叱ろう、暖かく」

井上希道

自分の子供を信じない親は一人もおられません。親にしろ子供にしろ、取り替えることのできない、生れた時から絶対な契りとしてお互い無条件に信じ慈しみ合って生活しているのです。その生活全体を通して親の教えとして子供は人間らしさが育つ訳けです。

その成長過程は実に微妙であり多彩で、一口に言い切ることは危険ですが、心を取り上げれば、本来私達の心はより楽な方へ、より心地よい方向へと流れ、逆に苦痛や不快からは逃れようとする指向性を有しているのです。

大人でも子供でも、人の大切な魂といえますか自尊心と申しますか、自分がそれなりにした行為が認められずと、それ迄の苦労や努力がいっぺんに報いられて、「して良かった。」という満足感、充足感が湧き出て実に気持が豊かになるのもです。

ところが心外な批判や中傷を耳にすると、たまらなく不愉快になり、人に依っては不信感におそわれて自信を失うことさえあるのです。そういう場に居たくないし、そんな心ない人とは出会いたくないと思い、早くそういう人達や世界から逃れたいとさえ思うのです。

人間の心というものとは究めて法則的、機械的に出来ているのです。心を分かってくれる人には安心しておれるし、人の心を覗いて弱点をつつき人の心の血を見たがる人には理屈なしに警戒し心を閉じるものです。このことは大人も子供も同じです。

私達大人は子供に対しては教育する側にあり、常に「良き人になれ、賢い人になれ、健康であれ、美しくあれ、皆に愛される人になれ」と願っています。こういう願いや理想があるからこそ教育に意味があるのです。教育には必ず人間とし親としての願いが託されているのです。子供に懐く祈りというもの、

又どの親にも共通しているものです。共通の心として親は我子を何処の誰よりも信じ愛しています。当たり前のことです。そうでなければ子供を育てられません。

しかし、親子の絶対な契りとしてはそうであっても、日々変化し留まることなく行為して、その半径が日増しに広がって行く自分の子供に対し、絶対に理想的な行動をしていると信じて、何らの不安も托かない親は先ず居ない筈です。

「怪我をしなければよいが、させねばよいが、悪いことをしなければよいが、いじめられねばよいが・・・」  
といつも心の何処かで心配しながら祈っているものです。親として自然な心情です。していて当たり前です。この心が有るからこそ子供を無事に育てるという使命が果せるのです。人類がずっと続き進化を遂げながら今日に達して来れたのも、自然な親の愛情と祈りに依って、文化や文明を育てて来たのでしょう。もし、子供という未来を私たち親に託した存在が無かったならば、又子供への愛が無かったならば、とても今日の様な文明の進んだ社会には成っていなかったのではないのでしょうか。

単に親だけの祈りではなく、社会にとりましても何処の子供さんも皆な、立派に成長してもらわねばならないのです。社会は一人一人に依って成立っていますから、未来を担う子供の居ない社会は滅亡するしかないのです。何処の子供さんも変りなく立派に健全に育っていかなければならないのです。子育てはもちろん家庭が主体です。親に勝る愛情は絶対にはないからです。子供に対する親の気持は何処のご家庭も変りはない筈です。

家庭は或る程度お互いに許し合い認めあって暖かく生活することが基本であり成長の根幹要素です。しかし家庭の外は社会です。他人同士が共存している一つの間です。そこでは家庭の様に親の様に寛大に許したり認めたりしては済まされない、他人の生活もあるのです。しても許される家庭と違い、同じ事であってもしては許されないのが社会です。ですから社会はルールです、秩序です、それは公正平等です。

暖かい家庭にあって、この大事な社会ラインを義務と責任の中心として、自然な生活の中で育んでいかなければなりません。家庭教育とは勉強を教えること以上にこの事が大切なのです。勉強は学校でも他人でも教えられますが、人間としての徳性や倫理観の元は親でなければ育てられないからです。

そうは言いましても親にも限界が有ります。親の側から離れて外に出た子供には、誰れもがその子の親となって暖かく見守り、ルールをわきまえるよう接するべきでしょうし、それが本来の社会人であり大人のあり方でしょう。

私達の廻り全体の方々によって、この様に暖かく見守られ導いて貰えたならば、どんなにか親としては安心なことでしょう。

子供が注意されて親が腹を立てたとしたら、その親は未だ充分親、大人に達していないからです。そのような親は必然的に理想や願い、祈りが浅いのです。可愛いだけ、愛しいだけでは健全に成長しない事が分かっていないのです。若しこの様な親に依って、折角親切に見守り指導して下さった人が不愉快な思いをしている場合には、廻りの人方がこの親を成長させ引き上げてゆかねばなりません。よく説明し、本当の子供の成長を願うようにすべきでしょう。

誰れだって注意されたり叱られて心地よい筈はありません。ましてや自分の最も大事な可愛い子供が他人に叱られて泣いて帰れば、一般には心配から始まり腹を立てるでしょう。しかし、我子が注意された場合は、腹が立つより先に注意して下さった親心を有難く感謝しなければいけません。そして、「これからもどうぞ悪い点は叱って下さい、御願い致します。」と頼めば、その方は一層暖かく見守って下さることでしょう。

私達が子供の無法性、不善なる行為を見つけ次第に注意し、ルール違反を悟らせれば必ず改まります。何故かという、知ってルールを犯しその度に注意されると、良心がいたゞまれなくなるからで

す。若し一片の行為が善意であったら、率直に讃えてその立派な心得を正しく評価されれば、言葉にならないその心地を自然に欲するようになります。その方が気持ちいいし、安心だし、自分の存在感に確かな手応えがあるからです。

昔は近所の子供達皆なが集団で遊んでいました。上級生から下級生まで居て、皆なの努力と智恵を結集して、上級生の指揮下で心身を最大限に発揮して遊んでいました。失敗して大人に叱られたり、仲間に迷惑をかけたなら、その場で子供憲法によって裁かれました。又、子供同士よく観察されていて、それぞれの子の能力特技に対し素直に皆なが敬意を示し認め合っていました。一人一人の心の中に仲間が居て、そこでは自分は認められていて、はっきりと存在価値を自覚し自信を持っていました。そこに自尊心が培われ、つまらぬことをしたら恥じだという気概がありました。統率された子供社会の中で、負けてなるものかという健全な自負心が育っていて、どんな事でも強く堪えさせてくれました。

又、仲間に迷惑をかけたリウソついたり裏切りがあったらどうなるかという自覚がありました。そこには自動的に仲間の一員として、守らねばならないルールが心の中に出来ていました。ここにちゃんと社会の厳しさを身に着ける場があったのです。

今は全く孤独です。自分達で作った子供の社会がない為、先ず、自分の存在他人の存在が確かめられません。子供同士の絶対なる憲法がない為、他人に対して常に無秩序で事足りるのです。ですから守らねば仲間にされないという心の法規がありません。仲間意識に依って安心して遊んでおられるし、次々に新しい知恵と技術を身につけ、それを競い合い認め合うという躍動した社会がない為、大事な社会性の基盤が育たないのです。今日的には尚の事、この競争社会にはこのような躍動した幅の或る精神が育たなければならないのです。

テレビと塾、その上御金を使って楽しむ、これでは無法化してゆくのは当たり前です。訳も分からずテレビに映る情報が当たり前感覚で育ってしまう今の家庭では、子供達を社会へ正しく方向づけする何もありません。これが今日の自然な有様だなどと迎合的な分かり方をしてしていると、あつと言う間に自分の子供が自分の子供でなくなってしまうでしょう。

今のこの様な状態の中では、子供は親に対する絶対観や信頼尊敬の念などが想像以上に育っていないのです。親の背中を見て育つと言ったのは、テレビも無く冷蔵庫も洗濯機も無い、皆で力を合せて生きている時代の事だったのです。皆が皆に存在観を与えていたからの話しです。ですが、今日の状態はまるで違います。背中など見ているよりテレビとゲームで感情を満足させています。親に頼まれて塾に通っていれば子供は任務を果しているのです。それで済む時代と成っているのです。とにかく子供に映る姿が現実的でなければ少しも感性には及ばないのです。つまり、衣食住のために、何時も親が一生懸命に働いている姿を見ていればこそ、親の存在が有難く偉大に思えるのです。簡単に言えば皆何にも苦労しなくても生活が出来る今では、金稼ぎの親の背中では教育の背中ではないということです。

この事は心して家庭生活を健全にしなければならないということなのです。心を親の方に向けさせて、人間的な必要な内容の会話を充分にして居なければ、子供の中身はまるでテレビと繁雑な情報で培養された他人なのです。他人と言う言葉はきついです。親の意志や気持ちや価値観、要するに親子として当たり前の精神文化が伝わっていないために、本来の親によって育ったとは言えない子ということです。

社会人である私達がせめて目に触れた子供達に対して、「やっぱり善いことをして良かった、」という確信を持たせるべく讃え、「やっぱりこれをしたなら具合が悪かった、」と思う反省の動機を与えてやりたいものです。

心は心でしか導きようがありません、やがてより健全な社会人に成長してくれますことを信じ、皆様の暖かい御理解と御協力を御願い致します。

自信をもって、どこの子であろうと善きは讃え、悪しきは叱っていただきとう御座居ます。

ああせよと口で云うよりこうせよと

やってみせるが教へなりけり

昭和五十四年六月一日 記

### ほめ方、叱り方

人間十人十色の通り、感じ方、受けとり方、理解度、反省力、意志力、判断力、記憶力等いづれもピンからキリまでの開きがあります。ほめることも叱ることも一様一式ですむ筈がありません。同じことを二度三度同じ様に讃えられて同じ様に爽やかに感じる子と、「バッカじゃなかるかあのオッサン、何遍同じことを言うたら気がすむんだろう、当たり前のことを、」と思う子供もあります。その子供が納得する暖かくてするどい、しかも簡潔に叱られた場合、ヘタにほめられたより返ってさっぱりとし、気持に一本スジが通ります。

皆な心地よいことはいくら有ってもよいのですが、不快なことは有って欲しくないのです。子供の、この的をはずさないよう語ることが大切です。ほめることも、叱ることも、目的は心身の健全な成長をめざしたものでなければいけませんので、真に子供の心を理解し、子供への祈りがしっかりしていることが肝要です。さすればほめればほめたで、叱れば叱ったでその子供と信頼関係が強くなることでしょう。健全なる社会作りを本当に願うとしたら、政治力や政治家にではなく、もう子供への教育でしか夢を託すことは出来ません。私達の廻りに居る夢を担ってくれるであろう子供達を、私達大人は考えなければいけないのではないのでしょうか。

そこで先づ、

#### 一、自信をもって簡潔に。

ほめても叱っても、子供の方ではいつもこちらを観察し評価しています。自信のない大人と感じた瞬間に、この人には不安を感じず、安心してついてゆけない、ということになり言葉に耳をかきません。子供は天然に体全体でその人を知る不思議な力を持っています。自信力の裏付けはその人の生き様から生まれ出るものであり、日々の行為の人間性に左右されます。

たとえ古くて粗末な衣服でも、毅然として何心なしに着れる人は、それだけ自信があり、衣服や持ち物ではどうにもならない、人間にとってずっと大切な美しいものに支えられているのです。この次元から語られるものは間違いないのです。

#### 二、誉める的は正確に。

先づ、行為の善い点を適確に具体的に指摘することです。これで認めたこととなります。これだけでもよいのですが、「君がそのように考えたということが素晴らしい、ということは君が立派だったということだし、君の御両親や家庭が立派だからだよ。」と重く深く讃えられたら、多分その子は「たったあれ丈けのことなのに、大人や社会の人はあんなに深く自分達を見ているのか、して良かった、あれが悪いことだったらお父さんやお母さんに恥じかゝしちゃうとこだった。」と自分を更に警めるに違いありません。

ところが崇高な決心をして、次に又親切をした時、「年寄りに親切にするのは当たり前だ」とか、「あんな子でもチツタア親切心があるんだな、」とか、「今の子供は賢いから表面では結構まじめそんなことをするが、陰で何をしとるか分ったもんじゃない、」などとひねくれた大人の言葉をあびたら、その子は自尊心に照してほこらしい気持、崇高な心であったものがメチャメチャに傷つき、二度と再び進んで善為をしようとは思はないでしょう。

逆に、「人の真心ほど暖かくて美しいものはありませんね。口で云う人も居るでしょうし、云わない人も居るでしょうが、誰だって心ではそう思っているのですよ。」このように云われたら、その子はもう悪い事をするような心の姿勢ではなくなっているでしょう。または、その子の善意を更に引き出すように反省するように語ることで。

### 三、叱る時には的をはずす。

叱られることは最も好ましくないことです。お説教されることだけで面白くないのです。その上、「こんなこと一つわきまえられぬようではダメじゃないか、だいたい家庭がなっとらんからだ、」「今頃の子供は理屈丈け一人前で、自分のしてる事は何も分っとらん、」「人間ならどうしてこんな事が分らんのか、友達が悪いからこんな事をするんだらう、もうあの子とは遊ぶな。」などと云はれると、反省し心を改める以前に、心を重くし過度の緊張不安、自信喪失に迫りやります。そうすると善意すら芽吹く源を失います。激しい子供ですと、自尊心を傷つけられたことに怒り憎しみを抱きます。こじれると悪意をいだき、出来心での行為を、異状な責められ方をされると怒りや口惜しさの腹いせ代償行為をやります。その子の反発緊張が終るまで続きます。注意した事が裏目に出たことになりませんが、実体はそういう方向へ誘導したとも云えるのです。

「こういう事はしてはいけないから、君達の友達にも注意しておいてくれないか、」と簡明にすませることで。その位のことで効かないと思うかも知れませんが、見逃さずやりますと、堪えられなくなり、自然にそういうことはしなくなります。

### 四、大勢の場合は大声で歯切れよく叱る。

大勢で何事かしている時は子供達一人一人に流れというか勢いがついています。一人の場合は決してその様な事をしない子でも、勢いに乗じてエスカレートします。一台の自転車が不自然に置かれていたら、二人目になると、「自分丈けが悪いんじゃないし自分が先にした訳じゃないや、」という心理で又置きます。二台あったら空間の延長観念から即、三台四台と続いてゆきます。複数の勢いというものです。大人でも全く同じです。こんな場合、一人丈けを注意しますと「何んで俺丈け怒られにやなんのか俺が先にしたんじゃないのに、」という不満が生れ、何か大変損をしたような気持ちになっていじけます。

「こんな所へ置いたら、皆ながあぶないじゃないか、すぐ直せ！」と大声でやりますと皆な同時に、「アッ、しまった、早く直せ！」となるのです。素直にそういう心になるのです。しかも、誰れとはなしに叱られた場合は、平等公正にて自尊心に傷つかないのです。むしろ、「俺が悪いんじゃない、先にやったヤツが悪いんじゃ。」となり「あんな所へ置いて怒られた丈け損した。」勢いの流れは、後になると悔まれるものですが、其の時はおうおうに付いて流されているものです。叱ることはその流れを教え、良識にもどさせることが目的なのです。

### 五、心のあとしまつを大切に。

ほめたにせよ、叱ったにせよ、言葉をかけた丈け関係が深くなったのですから、その後無関心無表情はいけません。ほめた子でしたらその時の暖かい言葉で、「変らぬ評価をして見ていてくれる！」との確認を交す語りかけをすることです。叱った子でしたら決して前の事に触れる、若しくは感じられる語り方はしないことです。最も不愉快な事であり思い出したくない事だからです。暖い言葉でアッサリとやり過せば不愉快な心も自然に消えます。善行は持続するように、不善は恥かしくなっていくように、そういう心の誘導をめざしての対応であればよいのです。

### 六、善いことは他人に話しても、叱ったことは決して人に語らない。

「あそこの子供さんは素晴らしいですね。」「御宅の御子さんは立派ですね！」と聞かされることは、聞く側親の側にとっても大変気持ちがいいものです。夕食の時など、「今日、あなたのした善い事、御母さんの耳にも入ったわよ、人様はチャンと見ておられるのよ。善い事をすることは、その人の善意がどの位あるかの尺度だから、それはそのままその人の価値なの、だから自分の価値はいつも自分で決めていることを忘れちゃダメよ。自分を慎しむようになったら一人前なのよ。」と語っていただく動機にもなります。

その子供さんは自信を以って善意の尊厳を信じるでしょう。このようになれば不純な考えは起きなくなっているのです。

反対に、叱られた事が他人の口から、親や自分の耳に伝わってきますと、「あの時チャンと分つたし、謝ったのだからあれはもうすんだ事じゃないか！それを人に言いふらしやがって、チクショウ覚え

ておれ！」というような心を引き起し易いのです。つまり、第一反抗期といはれます三才頃からの独立の芽生えは、自意識と共に自尊心の確立期なのです。

どんなに悪作をしても乱暴な子供でも、自意識そのものが自尊心であり恥らいなのですから、マトはずれに刺激誘発してしまうと、己の名誉や意地にかけて色々な事をするようになるのです。こうなりますと、叱られても説教されても体罰を受けても一向治らないばかりか、いよいよ決心しひらき直って悪るぶり全身で抵抗します。

元は、自尊心を無視され傷つけられた事の悔しさ歯がゆさによるものです。何人と雖も、人間としての自覚が生ずるところの自尊心、魂は神や仏でない限り、絶対直接に切りつけてはならないのです。何故なら、この自尊心こそ善意や思い遣り、恥じらい道義心や倫理観の生ずる源なのです。それをいきなり無視して切りつけたりすることは、総ての善なる心も殺してしまうことなのです。学問や知識で育成されたり補われたり出来るものではありません。人間の尊厳は平等なのですから、御互い尊敬し信じて語ればよいのです。魂は魂でしか語ることはできないのです。

今の社会全体子供達にとって住むにふさわしいとは云い切れません。自然も減少し空間も狭ばり、毎日勉強と交通地獄に命をさらしています。このような環境下で、どのようにしたら秩序正しく親切で人情豊かな人間に育ててもらえるか、間違っても人の悪口、先生の悪口社会の悪口など子供の前で語るようなことがあってはならないのです。善きことを素直に認め尊敬として語れる人は、魂も又美しいし、それこそ子供への送りものなのです。

#### 七、他の子供と比較して語らない。

生物にとって、「生きる」ということは最も重大なことであり、何よりも第一原則なのです。その生命維持力は、時には生存競争をしてとにかく生き残ろうとします。つまり人間を含めて、最終的には自分だけでも残ろうという、「他の存在を否定し許さない、」冷たいものが内在しています。動植物の世界では、その力による結果が端的に現われますが、人間には良識に裏付けされた常識というものが働き、平均的判断で他人を認め合っています。

しかしよく心を解明してみますと、隣り近所の悪口を云い人のことをとやかく云うということは、先ず前提として自分の心がそんな働き方である、ということです。質的には嫉妬、恨み、欲心、勝他などですが、その心の元になっているものは、生物としての生命維持本能、即ち「他の存在を否定する、他に勝る」という「生きる」ことの冷酷なまでの第一原則によるものです。だからこのような原始未分化な人にとって「自分にとって絶対存在は何か」というと、やはり自分」なのです。精神がこの生物的な第一原則、未分化の次元より脱皮しない限り、人間一人一人の内に「自己絶対、他否定」の冷たい本能に左右される為、この地球上の総ての争いは消えないのです。

人類の幸せの為の教育であるとするれば、これからの教育は如何なる方向に目覚めねばならぬかは明白な筈です。成る程、その子供が生れる前の因縁の違いは大きいし、性格のもつ力は大変なものです。然し生れて後の育ち方は更に重大なものです。

子供をほめたり叱ったりする時、他の子供を引き合いに出して、「〇〇君に敗けてるじゃないの！それでもあんたは平気なの！お母さんは口惜しいのよ！」、「あなたは〇〇さんよりもよく出来たわね。〇〇さんより〇〇さんよりもえらいね、立派よ！」などのようなことは教育でも何んでもありません。生きる事の冷酷な本能丸出しです。その子は知らず知らずの内に、その本能が刺激誘発されて、未分化のまま根を下し芽を出します。そこは自己絶対、他否定の世界で、親子兄弟友人同士が殺し合うという悪の根元なのです。

人間の心は実に法則的に作用していますし、本人の自覚以前に出してしまいますので、時に知識や教養、意志や判断も何んの役にもならないことが生じます。親の方は努力心を啓蒙するつもりで、激励のための引き合いだったとしても、子供の法則性からすればそうはいかないのです。

努力する事は他に勝つ為にするのではなく、人間として為すべき果すべきこととして教えねばなりません。友人近隣は相手として意識させるのではなく、親兄弟の次に信じた存在にしてゆくことです。そして大切にすることを教えるのです。差別問題は自ら根本的に解決するのです。人を信じ尊敬する心は、生物的次元からではなく、本来の人間の次元に基づくものです。

自己絶対が破れ他否定が壊れてゆく教育でなければなりません。人間性とか善なる心或いは高尚さの源は、確かに一つ心から生ずるのですが、心に敵が宿れば同時に不安や憎しみ恨みも宿りますので、何より先ず心が平和で安らかな自信と充足感に満たなければ、本当には生じてくれません。究極の理想教育は自他一如に達せしめることにあるのです。真の平等平和な世界はそこにしかないのです。このことは、あらゆる文化、文明、科学、他の教育より最上位に扱われ求められねばなりません。

人類の存在にとって最も大切な此の事は、やはり全地球的願目でなければなりませんし、それを使命として求めてこそ始めて真に近づくことができるのであって、その為にはその重大性、必要性、そしてその世界の素晴らしさを、今こそ私達一人一人が自覚しなければならない。

人間が人間を産む事と同じように、人間が人間を育てるといふ事の神秘性や命の大切さ、そして健全な人格形成の困難さを、もっともっと自覚し、深く魂に銘じて進むべきである。

子供は本当に天下の宝であり我々の夢である。その宝をして真に価値ある光を出さしめてゆくのは、私達親であり学校であり社会ではないだろうか。

一、の「自信をもって簡潔に」をもう少し突込んでみます。

先づ自信に就いて説いてみましょう。

自信のある人と無い人とでは何をやっても実在感、生きている事実の味合いが全然違います。一言一行の重味も自ら違ってきます。指導とは簡単に申せば、必要な方向づけ、であり、道を教える、ということ。それを示し、授け、そこへ導くことなのですから、道を説くその人が先づ道の人になって居なければなりません。でなければそれらの一言一言は単に言葉に終わってしまいます。それでは道であるべき、絶対性、尊厳、公正さ、必要性、美しさが伴わないため、善なるものとして活性化して伝わりません。

つまり、先づ社会人たり、親たり、夫たり、妻たらねば、人としての分き前えが出来ないことになります。人たり得た人に於てのみ本当は人の親になる資格があるのと同様に、その道その道にも長じて始めて、その道の指導者たり得るのであって、自信は道の上に自ら備っているものです。道なき自信は自分よがりの自信であり、それは極めて毒性の強い独善性となり、道としてあらねばならない一般性、公共性を失って廻りの人からも社会からも疎まれる我見にすぎません。

道なき指導者、実力なき指導者が引き起す様々な出来事には、こうした明かな要因が基本的に備わっている生ずるのです。

自信の根本はこの様に先づ人たり道たることより始まります。しかしながら、残念な事にこの道は世間一般の人の道であり自信であって、大切である事には違いありません。これから御話しする事は最も根源的なことであり、自信も比べものにならない大自信の道の話です。

自信が生まれぬのは、心がしかと定まらない丈けです。では何故定まらないのか、という問題になってしまいますが、一言で申せば、智や情や意即ち心が一点に治まらず、それぞれ勝手に見た事聞いた事思い出した事などに常に取りつき、振り廻わされて定まることなく走り廻っているから、本当の自分、心の落着く源を失ってしまっている、というのが今の様子です。

振り廻わされて動き廻わるものが思いとして作用してゆきますので、思いに思いを重ね、次々に二念三念を引き起してとめどもなく心さわぐのです。他人には如何様にも説き道を語って、信頼され尊敬を払われてみても、さて自己自信本当に信じ尊敬し愛して疑わぬか、ということになりますと、とても無理なことです。それでは本当の自信、確固たる自分とは申せません。

ボロ屋に住み、粗食に甘んじ、質素な衣服に身をつつめども、大然として何心なくさわやかに生活して居る人は、その自己の分限に安住して心の定まっている人です。

他が気になってしまうとどうしても比較せずには居れなくなります。自分はボロ屋でまづい物食ってボロを着て、みじめだなという具合にしか思えぬ人は必ず、彼はいい家に住みうまい物食っていい物着て、うらやましいとなります。又自分よりみじめな生活者に対しては優越感をいだき、卑下の気持を以ったりする人なのです。

心にうらやむ気持やねたむ気持やみじめな気持や卑下の心などを、多く持ち激しくいだいて居る人ほど心中波高くして修羅に近いのです。

若し、うらやましく思っている家庭に火事であるとか交通事故であるとかの不幸がおきたとしたら、心の片隅でヤーイザマミロというような不幸をよるこぶような、カタキを取ってもらったような心地よさを感じる人間になってしまうのです。

じゃ、そう思う人は皆な、いつでも人間の皮をかぶって居るだけで、人間らしい熱い涙はないかという、これはとんでもないことで、人としての心の豊さは等しくあるのです。ですから自と他と比較したりせず、したがってうらやむ心なしにその様な不幸に出合ったりしたなら、本心より素直に熱い涙が流れ、

悲しみにひたって真底気毒に思うのです。人間はやはり人間なのです。暖い血の通っている人の子なのです。誰しも皆なそうなのです。

では、何故天地の差ほどの違いが生れるのでしょうか。

先づ何よりも重大なのは向上心が無いことです。高上心即ち自分で自分を高めようと努力する心がなければ、自然安易な事、たちまち自分に都合のいい事、面白く楽しい事に走ってしまうのも当たり前です。ですから心地よい方向に流れようとする我欲の毒気に振り廻され、いい事だからやろうとしても決断出来なくなるのです。こうなりますと、物事の存在価値、本当の必要な事など見分けが付かなくなってしまうのです。

どんな些細な物事でも、真面目に一心にやれる人は、すべてがその人にとっては生きて作用し、常に充実感につままれて居て心が豊かなのです。どんな立派な事でも、いい加減な気持や軽々しい心、遊び心のような実のない気持でやれば、それは遊び事でしかありません。結局自分はそれ丈けの内容しかありませんという事になる。

雲泥の違いがあるでしょう。

一心が確立していない自己というものは、物の命や存在価値が分らないし、我欲の毒気に振り廻わされて心の定まり様がないから二念三念に流れて迷い苦しむのです。常に一心であれば万事道に契ってきますので、道が道を教えてくれます。つまり、自分で自分の心が分るから、自然に道に契ってくるのです。一心には凡悩や邪念がないから、物事の本質から生れ出た心なのです。

一心とは今の心です。今生れたばかりの純粋な心です。本質から離脱した二念三念となって飛び廻る以前のカラリとした無念の心です。その事丈けの心です。一心に行為ばかりには、他人の仕事と思うスキ間はないのです、又自分の事とも思わず、只菅ただ我を忘れてやっている丈けです。あれこれ思いに遊び分別に走り比較して心さわがす様な、二念三念の雑念の全くない世界です。

裏切りや裏おもてがありませんので、この人を誠意の人、人格者というのです。道の人には我欲の亡者は居ないのです。決断はその人の行為自体がそれです。今ばかりですから決断の生活ともいえるのですが、心の定まらぬ人が定めるのを決断というだけで定まって一心に在る人にとっては決断は始めからついている事なので、わざわざいうのは余分な事なのです。

こういうことになります。一心が確立されていない心定まらぬ人に於てのみ、智、情、意などと分けていえるのですが、今に定まっている人には、一心ですから分けて見る事は出来ないのです。何故かと申しますと、振り廻されて勝手にそれぞれが飛び歩く事はなく、今に治まって働き一心上に展開してゆきますからあれこれ分裂しないのです。だから何の心さわぐものもないのです。こうした汚れ知らずで分裂していない元の大自然の心を一心というのです。又無念とか無相とか無性とか三昧とか色々にいいますが、何といっても今、本当の今の心をいうたものです。

どんなに立派な家でも他人の家は自分にとって何の価値もないが、どんな粗末な家であろうと自分の家はかけがえのない一日一日の有難度い宿であり御殿です。家は立派であるとか粗末であるとかが本質ではなく、家は即ち家なのです。着物も食物もとにかく総て人間的分別で色々思うて見ても、本質には何のかかわりもなく、只その物ばかりでしかありません。そこに住む人は人であって、根源というか本質的には家や着物とは存在そのものの作用が違うのですから、本来比較しても値いが出て来ないのです。だから出来ないし又する必要がないのです。

ですから本当に今に目覚め、一心が確立されますと、悉く本当の様子が判明してくるので夢中に在って迷うて苦しむような愚い事は自ら出来なくなるのです。

やつのあの家は立派だ、おれのはボロでみすばらしい、やつがうらやましい、などとはならないのです。家を見る今の時は家、それしかありようがない。家が心となり心が家となっている、天地と同根、万物と一体はこの事をいうのです。自他の不用な意識が心をひどく小さくし、束縛していますが、一心にはそんなものはありませんから、どの家を見ても、何を見てもチャンと奇麗に確実に、何事もなく始まり何事もなく今今終って行っておるのです。

他人の家を見る今はその時の今でしかなく、自分の家を見る時はすでに時が違い、作用が違い、存在そのものが違うのですから当然価値も異なる今なのです。これこそ生きて輝いている今の世界なのです。ここに、絶対に救われた世界が厳然とあるのです。本当に今に目覚めた人、一心を確立した人は心の働きが実に現実的で、その人に於いて自由で最高に作用するのです。ここに理想や夢が加味され希望も道の流れに働き出て人生をふくらませてくれるのです。

そこに始めて本当の人間らしさが現われ出て来るのです。一つ心で万事に対応するのですから、自分のためとか他人のためという無駄な二念三念に落ちた分別心がないのです。本当に喜び、本当に悲しみ、本当に行為するだけです。心がもつれていないので常にスッキリしているのです。自信というより、その時その場に安住して他をものともしない定った心です。

その時その場とは、何時でも何処でもという事です。もっと現実的にいえば、今、この瞬間の様子です。この瞬間の真只中に、本当に余念なく一心に只あるや否や、が不動の自信であるや否やになるのです。

本当の世界から申せば誰も皆な、この今の真只中にはずれることなく始めからチャンと存在していて、何も迷ったり違ったりして居るものは居ないのです。心も又今の上に於てのみ作用し存在していて他には何にも無いのです。今確実に心として働いています。

では何故、この今の絶対存在が、これがこれだ、と確実な自信とならないのか、その生命のいとなみである一瞬一瞬の生活自体に、確かな手ごたえのある味が得られぬのか。究極に残る最大の問題は畢竟これに尽きるのですが、ここから先の奥は道理や学問では如何ともすることが出来ない現実そのものの世界になります。ですからそうならうと高上心がじっとさせてくれなくなりまして、即現実の今、何事であろうと行為の形ちにとられず、心静に一心を離さぬ様、油断なく今を護り通す努力をするのみです。元来今そのものですから、四の五の思う愚をやめていきなり為すべき事に、何も思わず我を忘れてひたすらやるのです。今に安住する力は努力なしには絶対得る事は出来ません。安住とは今に成ることです。これが自信です。我れのない、自己を超越した大自然と一体の大きな世界です。

今のこの現実は一瞬以前のずっと過去からの結果でしかありません。過去が今に実と成って居るといふことなのです。そればかりではありません、今が原因となって一瞬先の未来を現実として作って行きつつある今なのです。

今が過ぎれば過去と称ばれ、未だ来ない今を未来と名づけていますが、元は今です。三十年前もこの今だったのです。十年先きも千年先きも何ぞあやしみ恐るゝに足らず、この今なのです。勿論、物の姿形は時の縁、作用の様子で変ります。在った物が姿を消し、無かった物が形を現わす働きが無常である今の作用です。しかし変化しつゝ確かに在る真実ということになれば、千年先きの、この今があります。

とにかく、見たり聞いたり縁に当って心が振り廻わされない一心に帰すれば、物が変化しようが、無くなろうが、物が在ろうが、今には一向どうという事にはならぬのです。今は在るがまゝなのです。真実かないのです。それで一心になりますと誠の人になってしまうのです。ウソ偽りが無いのです。つまり、宇宙はすべて原因結果です、今そのものが原因であり過去からは結果です。だから誠は有難度いのです。原因結果ですから、誠意を尽し努力を重ねて原因を作って行きさえすればその結果は自ら生れて来てしまうのです。

是くやれば是くなり、是くやらねば是くならないという実に公正無私の道理があるから真実として尊とぶのです。若しこの因果が、お金を積んでお祈りしたなら色々な結果が変って現われるようなものであるなら、それこそ信ずる何ものもなくなってしまいます。有難度くもなんともない、学問も科学も根本的になりたないのです。大自然の大真理は厳然として公正であり一つなのです。この因果の事です。

人間の心が今に治まらぬ、一心に定まらぬが故に真理が見えない、見えなければ夢の中の人、転倒妄想の人、凡夫人とならねばなりません。ウソ偽り裏おもてなどは人間にのみあって、この天下の大道大自然大真理の今の世界には、全くかゝわらないのです。

こんな偉大なる今を無視してしまうと、心はたちまち邪念となり煩惱となるのです。それ故に真実をくらましている、という事にも気が付かなくなるのです。だから、本当の自信、不安の無い大自己の心境が味合えないのも当たり前というべきです。心が如何に不可思議なものであっても、自分の上に模様されて在るものだし、処や時に合うて置き忘れて無くなるというのではなく、常に今にきちっと在るのですから、向上心を起し正しい努力を怠らねば必ず自ら納得出来る姿で作用する様になるのです。

さて、いよいよ最後の問題である如何にすればよいか？ ここが一番大切な処です。でも、要点はすべて説いて来ましたので、着眼点としてはおぼろげながら方向をつかんで居る事と思います。心を整理し、一心を確立する事により今に目覚めて、一切の今の本質を知り真理を体得するのですから、とにかく今の心は落着処なく動き廻っているそれを、治める、それは一点に集中することからです。

集中してやる事を一心不乱にやるといいますね、何んにでも自分の判断や考えや思いを入れずに我れを忘れて、その事ばかりになって行為するのです。思いが入りますから、すぐにそれに気が付く様に

徹底した注意が必要です。それが出来ると、思いが出たら直ぐに捨てられます。捨てるというのは、今している事に一心になる、そこへ帰るといことです。今に目覚めるのですから、今より心が離れていたら永遠に確立出来ません。どこまでも今、今、今一心にやるべく努力するのです。寝ても覚めても、今一心にやりよりますと、心が次第に落ち着き、飛び廻り方もだんだん少なくなり、自分の今やっている事が明かになってきます。それだけ全自己がそこに集まるようになったといことです。心境がこの様にして進んで来ますと、心のもつれもほどけ、だんだんと身も心も軽やかになり、今の自分の存在に手ごたえが感じられて来ます。充実感と申しますか自信と言いますか、依然として心は勝手に飛び廻っているにもかかわらず、思う様にそれを切り捨てられるようになり、一生懸命注意して今を護っていなければ一心になれないにもかかわらず、自分の考えや思いから脱せられ、一瞬だけでもポンと全自己がそこに在る事が出来る、たったそれだけでも、これが道だ、かく在らねばならぬ、というわき前が備わりま

す。  
それはそれで結構ですから、一にも二にも心が心に振り廻わされぬ様に、今なさねばならぬ事に徹底集中し離さぬ努力を続けなければいけません。一ヶ月や半年位いやって、こんなにやってもラチがあかんからとて明らめるようではダメです。

今しかないのですから、先きを思い煩うのは愚の又愚です。処詮自分からは逃られないし心と縁を切る事は出来ません、従って放っておけば一步の前進もなく、年と共にますます自信を失い、ひがみっぽくなり、死の不安に取りつかれて一日一日が何んとなく送られて終る、そんな己れで人生終るよりは、真実の為、自分の為、高上心あるが為におもむろに、今を道とし、今を生命とし、今の幸せの為に今を充実させ続けてやるべきです。この事を信じて決心しただけでも、心の整理が幾分かはつくのです。今は信じよ、と申しても信じ切る力が皆様にはないので、どうすることもできません、只ひたすら今に集中する事しかないのです。進めば心境が色々な事を教えてくれます。何んと申しましても努力以外には進歩も高上もないのですから、そう努力する事だけです。楽しい事や面白い事、そういう心以上に、もっと大事な大きな道を優先して進む努力心が必要なのです。

教育も文化も政治も平和が主眼です、世界が平和の一つになる事は地球の一大テーマです。我々もまぎれもなくその一人である以上、平和への努力をしなければ達成出来ない事です。もう分る筈です、我々一人一人の心が平和になり誠の人にならねばならぬ事で、他の人が平和をもたらすことは出来ないのです。我々が我々を治める事が出来れば、世界は世界が治めるのです。

自己の努力はこの様に世界と直結して存在しているのです。家庭が治まれば、ことさらに余分に叱ったり誉めたりする事もなくなります。でも乱れて油断をゆるされない今、子供達は我々の手で世俗の毒気にさらすような事だけはさけてやらねばなりません。人間として必要な道を与え導かねばなりませんので、叱ることも誉めることもやはり必要なのです。

次代を担う子供達の為にも、美に徹し善に徹し尊に徹し愛に徹した大自己にならねばならぬのです。かくして、大きく深く子等をいつくしんでゆけるのです。皆様のたゆまぬ努力を祈ってやみません。あゝ、努力努力、更に又何をか言わん。 合 掌

「簡潔に」について少し御話します。

一番気の毒なのは、本人の為だからといって、本人の理解力、吸収力、実行力など、今現在の限界を越えてもなを、やり過ぎてその結果子供をダメにしてしまうことです。叱ったり誉めたりする場合でも、一つ事を多く言い過ぎると、そこからは効果が減少してゆくのです。本人の為になるしちゃんと教えてをかねばと、小言を多く言い聞かせればする程、子供の心は、まだ言うのか面度くせえなあ、たまらない、なにがおれの為だ、やめてくれなどなど、全然教える側の意とは別方向へ行ってしまうのです。これは自信がないから思った事を言うて聞かせなければ不安なのです。逆に反応がこわくて、必要な注意もようしない親も、どちらも不幸です。どちらも限界を越えたらすべて方向を曲げてしまいます。

自信がない人程、言葉で意を伝えられると思ひ込んでいるものです。自信がないのは内容がないことなので当然かも知れませんが、叱るも誉めるも、或る方向を定め、親とし人間として共に安心出来るようにありたいから語るのですから、言葉以前に信じ合い愛し合っている存在の確認、親の限りない暖かい祈りは、生活全体からにじみ出て伝わるもので、言葉のうらづけとして常にその生活が根底になければいけません。

そういう生き様をしているならば、他人の子供でも自分の子供にでも必要最小限のわづかな言葉でちゃんと分ってもらえるのです。それは言葉の奥の、愛情、熱意、厳しさ、大きさ、力強さ、祈り、それらで語り出すからよく伝わるのです。その意が分ったらそこでやめて、そこからは本人の吸収力に任せて

やる処に、血となり肉となる精神の場が生れ、その精神に伝わり、そこで始めて納得がゆく理解となるのです。いくら道理を語り、それを分らしめても、情というか感情がついてこなくて何処かで反発させてしまつては、実行力になり難いのです。知で分らせようと語り過ぎる事より、先づ感情を納得させる事の方がずっと大切な事なのです。

最もすぐれている人は、ことさらに何も言はないで、然もきちっと方向づけされていることです。かたや言い過ぎて反発され離れて行き、かたや何も言はなくてちゃんとして来る、同じ祈りで同じ愛情を以ってして、只教育感のことさら的なものが入る事により雲泥の違いとなる、よくよく注意しなくてはならない。

聞かせて、それを消化し精神に作用され得るようになるまでには自分自身の中で色々思い考え決断をし、それを又思いにかけてゆき、今までの知識や分別を尽して結論に到達するのです。この精神活動こそが、自の確立となるのです。何も彼も語り過ぎ、説き過ぎてしまうと、この精神構造、精神回路というべき、物事を分きまえ出す力が育たないのです。

注意し教えた事の即効を、誰も期待するものですが、その為につい強制したり、ハイッと言はせて納得したと思ひ込んでしまうのです。

注意や教えは、物事のとらえ方、思考して行くその方向ややり方、いってみれば精神構造そのものを、つまらぬ事は捨て必要なものは重大視して延ばし、新たなものを加えてはより高等な精神活動が出来得るようにすることにあるのです。納得するという精神作用は、大人のように何も彼も理解できる判断回路を以ていれば何でもない事ですが、無い場合は大変なことなのです。言つて聞かせてその場で、実行に結びつく判断回路になるもの、と思ひ込んでいる大人の方が余程乱暴です。まだハイハイしている子を立たせて、さあ、立たせてやったのだからすぐ歩け、というのと同じです。先づ自力で立ち上れるように協力してやる事が、当座の願目なのです。そのためには多くの言葉は無用なのです。

日常生活の中で何気なく語っている間に、いつの間にやら吸収されて行くのが一番理想的なのです。無意識の間に、精神構造が良質に、しかも親を見て育ちますから実戦向きですぐ役立ち、自分が進んで行くのに迷いが無いので情操が安定して育つのです。少し位い不始末をしても、あんな事をした今とても辛くて苦しかろう、お前が善人である証拠だ、もうするんじゃないぞ。と云つて肩をやさしく叩いてやる事が大切なのです。他人の子供でも同じです。

毎日の生活それ自体が、そこで育つ子供にとっては出来上つて行く一つ一つの教育なのです。どんなに良い御話しであろうとも、それ以前の普段の接し方のほうが、暖い血となり肉となり、それが人間性を形成するという事を忘れてはならないのです。子供にとってはなをさら家庭がオアシスでなければなりません。

信じ合つていればいる程、注意はたった一言で最大に響き伝わるものです。将来どの様な人間になろうとも、最も人間らしい家庭の中で育てやらねばなりません。人類の基本的使命は、健全な次世代を育むことからです。そのためには健全な家庭が基盤であり、家庭を形成する親の一人々々が、人間として欠かせない共存と発展と平和のための、豊かな人間性を身に付けていかなければならないのではないのでしょうか。

子どもは毎日の親を見て、親の話を聞いて心が形成され、親の訓育を光として人格が明るく温かく成長して行くのです。矢張り大事なことは向上心を持ち、努力を怠らないことが第一ではないのでしょうか。